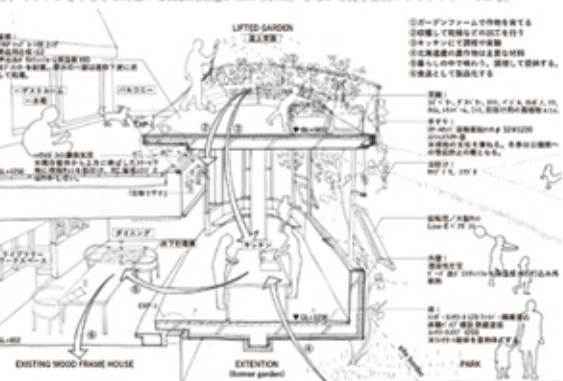


0 project 2つの異なる環境を鼓舞する躯体

東京で食に関する仕事をしていた建主は、豊かな自然と食材を求めて移住を決意。札幌市内の公園の一角にある、神蔵壁工法の住宅（以下2×4住宅）を購入し、広いキッチンと仕事場、ライブラリーをもつ開放的な住宅に改修することを求めた。気密、断熱性に優れた堅牢な2×4住宅を開放的に改修するのは限界がある。そこで、公園に面した斬新な庭にキッチン棟を増築することで、公園の開放性と2×4住宅の堅牢性を最大限に引き出し、総体として新しい環境を生み出すことを試みた。

屋上に菜園をリフトアップする屋根スラブと、既存住宅と公園の双方に対して程よい距離感をつくるために地面から1.2m浮かせた床スラブを、500mm角の2本のRC造の柱で支持する。2本の柱は既存住宅と公園に対して中立するように並び、浮いた躯体は敷地内に引き込む。異なる2つの環境を鼓舞する、住宅の増築のような、公園の増築のような、両義的な躯体(Ⅱ)である。住宅のサンルームであり、公園のパビリオンでもあるような増築棟は、既存住宅と公園の双方を活性化す。増築棟ごとに公園の開放感と光が柔らかく入り込むことで既存住宅の環境は一変し、どこにいても公園の緑木と空との一体感を感じられる、明るく落ち着いた空間となった。このように性質の異なる環境感を醸成させることで、公園の緑豊かな環境を兼ね備えた住宅が実現できる。(Ⅲ)増築棟は既存住宅と公園のどちらの環境に属するものとも見えてそのスケールのあられ(Ⅳ)が大きく異なる。既存住宅から見るとまるで神隠しのような2本の柱は、公園から見れば樹木に紛れるように、もののスケールは、隣接する環境との関係のなかで、大膽さ、繊細さ、ラグジュアリーさなどとして自然に現れる。このように環境と呼応して揺れ動くスケールは、建物を外に広がる大きな環境へと接続するための方法である。

(Ⅰ)食と生活のラボラトリー



(Ⅱ) 環境を鼓舞する、住宅の増築のような、公園の増築のような両義的な躯体

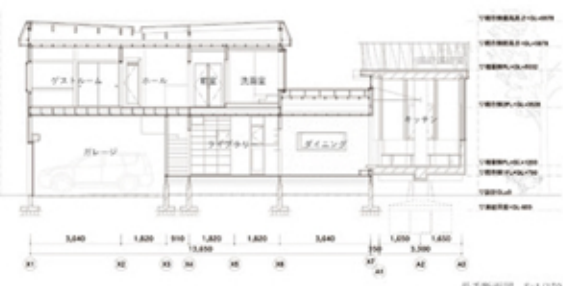
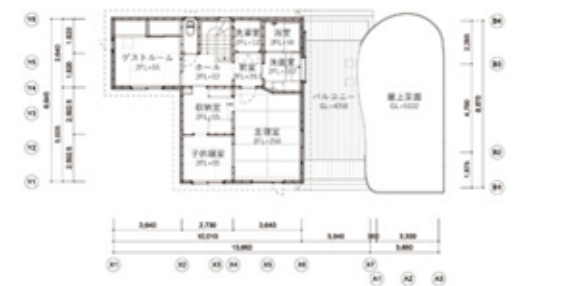
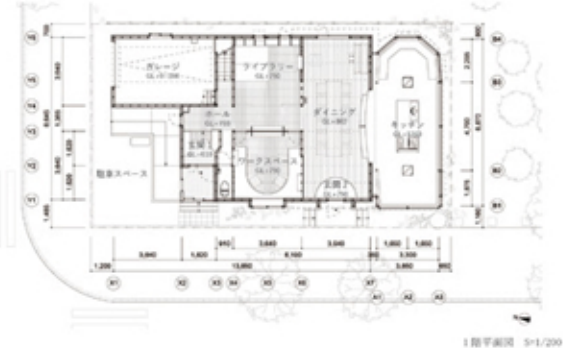


(Ⅲ) 夏と冬/極端な環境差

季節によって極端な環境差がある地域で生活を楽しむには、「ひとづ」の均質な空間では難しい。性質の異なる空間の共存を許せばそれが可能となる。こうした考えは、夏と冬で家を住み替える北方遊牧民の原始的な住まいや、北海道の開拓期から続く農家生活の過程で生まれた、石造りの土壁とガラス張りのサンルームから成る革新的な農家住宅などからヒントを得ることができた。そうしたアイデアの現代的な実装を通し、北海道の原始的な風情にアプローチしたい。

(Ⅳ) 異なる環境の間で揺れ動くスケール

2×4住宅にとって、神聖さを感じるRC柱は、公園から見れば少し大きな壁にすぎない。身体を揺れれば壁のようでもある。ガラス張りのように見えて、寒帯地帯の大きな断面寸法の木製サンは、土質な家具のように空間を包む。環境との関係によっていろいろな意味を持つようなスケールやプロポーションを注意深く設定する。



増築したキッチン棟。公園の樹木に囲まれつつ開放的で明るい空間。



道路より見る。既存2×4住宅の公園側に開放的なキッチン棟を増築。



大きく異なる空間と接続する。開放的な空間性によって、既存2×4住宅の限定的で狭い面積が、落ち着いた快適な「面」へ変わった。ダイニングの床は8パズルタイル。壁は石灰。両面効果を実現して土壁とした。



公園のパビリオンのような増築棟。



キッチン棟。既存の外壁がそのまま残す外壁となる。



二階洗面室よりバルコニー。屋上菜園を見る。既存住宅は、キッチン棟から屋上菜園に至る直線的なアプローチで見えて改修した。



夏のグリーンのような屋上菜園。プランターを並べ、菜園を育てながら風が少し下りて涼しい。菜園スペースは既存住宅のバルコニーに囲い込まれ、既存住宅から広らげたハイサイドライトが飲み込まれるからでexp.2としている。



ライブラリーよりダイニング越しにキッチンを見る。既存住宅はキッチン棟を通して光や公園の風景が入り込む。